別添

パネル一覧

障害者文化芸術作品等
調査・発掘事業

山口県では、2018年11月1日から3日にかけて開催した「2018アール・ブリュット展 in 山口ゆめ花博」において、新たに発掘した県内作家を含め、全国から14名の作家が出展し、のべ1万人を超える来場者に鑑賞していただきました。

この取組を一過性のものとせず、障害のある方の文化芸術活動のさらなる認知度の向上と活躍の場の拡大を図るため、2019年度から県内の障害福祉サービス事業所等における活動の実態を把握するとともに、優れた作品・作家を発掘し、広く県内外に発信することとしました。

本事業により発掘された優れた作品・作家をご紹介します。

調査方法

1. アンケート調査

山口県内の障害福祉サービス事業所、精神科病院などを対象に、活動時間内に作品を制作する時間の有無、つまりアトリエ活動を実施しているか、それ以外な活動か、また個人の自由な時間で造形活動をしている人はいるか等のアンケートを実施しました。

2. 電話調査

1.のアンケート調査で、アトリエ活動を実施している、また比較的人的な制作者を知っていると回答された事業所等に電話をかけ、詳しく話を聞きました。その上で、作品の写真データの提供を依頼しました。

3. 評価委員会の開催

障害者の文化芸術活動に造詣の深い有識者で構成される評価委員会において、調査対象者の決定や調査結果の報告を行うとともに、事業の課題や今後の展望などについて話し合いました。

4. 評価委員による訪問調査

評価委員が障害者施設や自宅等を訪問し実地調査を行い、作家を発掘しました。

山口県における
障害のある方の
文化芸術活動に関する
取組について

相談支援の実施

障害者本人やその家族、障害福祉サービス事業所等からの相談に応じ、関係機関の紹介やアドバイスを実施するほか、ワークショップを開催し、支援の創作活動を通じて相談対応を行う。

障害者アートセミナーの開催

障害者やその家族等に障害者アートの持つポテンシャル（協力可能性）を伝え、障害者アートの制作拡大を図るため、全国的に先進的な取組をしている団体から講師を招きセミナーを開催。

県障害者芸術文化祭の開催

【作品展】

県内で公募した障害のある方の作品約200点を展示するほか、中国地区各県と連携し、県外の作品も含めて展示する作品展を開催。

【ステージ部門】

障害者週間（12月3日～9日）に合わせて開催する「共生社会社会推進フェスタ」において、障害のある方を中心とした楽器演奏・ダンス等のステージ発表を実施。

「2018アール・ブリュット展 in 山口ゆめ花博 ―迷いのない風景 ―」の開催

2018年11月、山口ゆめ花博会場内で、県内外の優れたアール・ブリュット作品を一堂に集めた展覧会を開催。

日　時：2018年11月1日(木)～3日(土)
9:00～20:00
入　場：無料（入場記念記念品引換券）
展示作家：10名（県内作家2名含む）
展示作品：約150点
来場者数：11,566人

県庁あいサポートアートギャラリーの設置

県内の作品展における販売作品を展示する県庁エントランスホールに常時設置しているほか、県内主要施設において、巡回展やサテライト展示を実施。

調査員
プロフィール（2019年度）

中野 良寿
（なかの よしひさ）

山口大学教育学部教授、現代美術作家
1993年東京藝術大学美術研究科壁画研究室修了、1994年、スコットランドにあるダンレクタイナー開催のテンプル・ヒル・コミュニティーに滞在。2001年から山口大学教育学部美術教育教室での教育活動、山口現代藝術研究所（YCA）での活動、ソロ・アーティストとしての活動の他、コラボレーション・ユニット"ノーヴァケ・リューストラ"の活動など国内外で環境をテーマにした作品を発表（NEW TOKYO ART TOKYO（東京）、釜山ビエンナーレ2002（韓国）、山口ゆ花博2018、残さる風が…（山口）など展覧会多数）。2013年より山口市内にあるサルタナティブ・スペースNINJIN Ltd.代表、2016年より山口大学教育学部教授、現在に至る。

阿座上 涼子
（あざかみ りょうこ）

1978年生まれ、北海大学九州短期大学保育科卒業後、山口県にある知的障害者施設あけぼの園に入職、はんぶ工房結成に、帆布バッグの製作・販売をしながら、施設内にあるショップにて年に3回イベントを企画、帆布バッグの新商品発表、全国の障害者施設を特例子会社の商品の販売、県内の障害者の作品や地域のアーティスト、学校美術部の作品展示、地域の祭礼や学校の行事などによるマルシェを開催している。

岡本 英樹
（おかもと ひでき）

1969年下松市出身、社会福祉法人旭福祉会知的障害者支援施設第1しょうせい・延里城、1994年に入職し、2015年より支援課長、2016年よりサービス管理責任者兼務となり現在に至る。

原井 輝明
（はらい てるあき）

1965年宇部市生まれ、1994年東京藝術大学大学院修士課程彫刻専攻修了後、1997年より活動拠点を地元に移し、身近な社会問題から想起される創造を、絵画から派生する表現方法を用いて創作活動を展開している。2004年度に秋吉台国際芸術村Gallery（ヘルシンキ）交換プログラム事業またレジデンスサポート事業にて滞在制作を行う。2003年エネルギア美術賞受賞、2004年より活動母体PCA（イとうたつコンテンポラリーアート）を主宰し、地元商店街でシャッター壁画プロジェクト、駅舎アートプロジェクトなどを展開。2013年山口県芸術文化振興奨励賞受賞。現在宇部フロンティア大学短期大学部准教授。

アラオ 多枝子
（あらお たえこ）

1970年生まれ、京都精華大学芸術学部作画コース卒業後、知的障害施設信楽青年寮（滋賀）に入職、知的障害者が制作した作品を中心に年間10本ほど展覧会を企画し、全国各地の施設職員と連携し開催、同施設専属の作家の個展も毎年開催、7年後、プリミティブアート、ナイーブアート等の研究のため2年間はアジア、アフリカを巡し、帰国後オーダンス・アートミュージアムNO-MA（東京）で勤務、2008年、全国の障害のある作家の調査・発掘に関する事業に関わり、現在、NPO法人はれのくもっとスアートディレクターとして全国各地で展覧会を開催、知的障害者通所施設でのアトリエも運営している。

別添

村井　保　（下関市）

用殿　卓哉　（山口市）

櫻井　一城　（周南市）

栗栖　健一　（下松市）

三好　雅和　（光市）

別添

久米　文子　（周南市）

久米 文子
KUME Fumiko

1986年生まれ　山口県周南市在住

久米が作る刺繍糸の塊は、小さく捉えた銀河のように巻き付けられ、様々な色と一緒に第一杯に作られていた。この工房では糸巻器の機をよに作っているが、彼女の仕事はそれらを操る刺繍を踏うことである。その間に現れる刺繍糸はミシンを両手で広げた長さを4倍程さす、一つに変わて刺繍糸になっている。久米は引き出る刺繍糸を気にとめることなく、作り続けているという、その量は、深夜の透明プラスチック製衣装ケース3つ分にもなる。

糸が巻られてあができ、糸を束ね刺繍糸が作られ、発生した刺繍糸が塊になり、それをひらずら縫り取すことで塊は次の生成に進化する。久米の糸を前で営為は、永遠に終わることのないテスト縫造のやでも見失うことなく進化し続けるに違いない。なぜなら、彼女はオバン症候群の隠喩や、過去の記憶を自滅事を時間軸で前に別にを出した能力を持ち備えているので、軌道の尺度で言う、「作られ過ぎた」刺繍糸の塊は、様々な色が絡み合い、それ自体美しい物体として光を放ち始める、それは意味のかもしれないし、あるいは別のものかもしれない、あという素材そのものには手を加えず、行為として関わることで、たた物質を見せ意味を考えさせる、かつて40年代後半から70年代にかけて現れた「もの派」がそうだった様に。

（文：松井朋興）

西村　昌彦　（周南市）

西村 昌彦
NISHIMURA Masahiko

1967年生まれ　山口県周南市在住

もともと建築家として有名建築家の設計事務所に関わっていたが10年ほど前に高木陶磁建材営業部長、営業から社長ぎかり、現在はドローイング、陶材などを使ったオブジェ、写真作などをテーマにしたメッセージ性のあるインスタレーションなどを作っている。建築家としての経験からか、往往的、造形的、コンセプト的な表現の幅が広がて広い、施設を訪れた時も、椅子、サングラスに高機能マスクと二者の無用者など、明らかにパフォーマンスの要素を持ったもので制作していた。

一番作象的だったのが、何かに使われてすでに廃材になった瓦宗官に青のアクリルボッシュを塗り、その上から白の絵の具で不可思議で記号的なパターンを描いたシリーズである。古一色のモノクローム絵画や立体、オブジェなどについてはフランスのアーティストのイブ・クラインを思い出すしも少なくないだろう。クラインは青について、深い精神性を持ち、神秘的かつ非物質的であるとしているが、彼の青についてのこだわりも、ある種の印象を超越する色彩として使用されているのかもしれない。青と合わせられる白の絵の具は、その青の色が持つ神秘的な要素を損害しないようなパターンで描かれる。古代の呪文のようなあるいは植物の細胞のようなそのパターンは生命力を持って人意に描かれており、目本上がった作品はそれらの到来期間で、遥か彼方の神秘的な宇宙を目指すかのようである。

（文：中野良彰）

山本　心平　（光市）

山本 心平
YAMAMOTO Shinpei

1976年生まれ　山口県光市在住

最初に被がいる場所の空気感、温かみ、光が差してくるようなオープンな環境で生まれてくる作品群の雰囲気に驚いた。「みえくるはうす宮 exhibition（もの中には）」の環境での制作は彼の本来持っている繊細かつ野太く、ユーモアを持ったおおらかな面を露呈することにとても適した場所だと思った。しかし最近の変遷を聞いてみると、本人は不安定感があるときに絵を描いているということである。絵はもの(女優の被服はるかや本自分子の写真をもとに何度も描き直して描いている。基本的にパストアップのシルエットを一筆書き風に描いており、問題な描像による表現である。なんども同じ構図で繰り返し、繰り返し描かれており、見ているうちに段々と引っ込んでくるような感覚に陥われた。

彼はこのような絵をもとにして、大きめの布に刺繍を行なっている。カラフルな刺繍糸を使うことで、前述だが印象のある表現になっており、ハイセンスなファッションにもつながる味わいがある。何度も繰り返して描かれる女優像は本人以外には写真的には見えないので、独創的なアイコニックな像にも見える。感覚的に言えば今風のデザイン、イラストレーションとしてもポップで親しみやすい自分子の写真をもとに何度も描き直して描いている。基本的にパストアップのシルエットを一筆書き風に描いており、問題な描像による表現である。なんども同じ構図で繰り返し、繰り返し描

（文：中野良彰）

松田　知己　（光市）

松田 知己
MATSUDA Tomoki

1985年生まれ　山口県光市在住

漫画を絵を、下書きなしで一気に描いてしまう。彼の頭の中にある絵を、そのまま画用紙の上にアウトプットしているかのようである。色鉛筆を使い、消しゴムは一切使わない。消した跡も見当たらない、フリーハンドで、あっという間に描いてしまう。絵について尋ねると「意味はない」「誰でもない」。

絵の中に描かれている物体は、それぞれが何かの一部分であり、機械や建物の断面から発想得め、海や月のように水も流れている。この絵が動きだしたらどういう動きをするのだろう、けたたましい音の音や、激しく流れる水の音、騒々しく動く機械の音、描かれている物体のひとつひとつが発だしく騒の回る世界が、ありありと感じられた。彼の絵を通して、届れるような色彩感覚を彼の内側から感じた。

描き始めのきっかけを聞くと、「特にない」という。先生に褒められたことがきっかけだった。それからずっと自分の部屋で描き続けていた。大人になり引っ越しした時も、何もない部屋で最初に描いたものは「ちゃぶ台」。ちゃぶ台に向かって、誰に見せるためでもなく、絵を描きたいから描いている。なぜなら「絵を描くのが好きだから」。それは話すことと同じ、ごく自然で純粋な表現の行為だと感じられた。

（文：阿部上彩子）